

## 日韓議定書

仁川沖海戦で日本が勝利すると韓国政府内の空気は一転して日本にすり寄る姿勢になった。海戦直前に野戦砲兵監から公使館付武官として赴任した伊地知幸介陸軍少将の工作もあって親露反日の閣僚が退任したのも影響した。伊地知はドイツに2回も留学、モルトケに学んでおり、ドイツ語、フランス語に堪能で外国人に信頼されていた。それをうまく利用したのである。

林権助公使はこの機を捉えて韓国政府と交渉、2月23日、日韓議定書を締結した。朝鮮国内で日本軍の行動の自由を得るのが目的だったが、第1条で「大韓帝国政府は大日本帝国政府を確信し、施政の改善に関しその忠告を容れること」と規定した。また第4条では「日本はその軍略上必要とする地点を臨機収用することを得る」とし、第5条では「本協約の主意に違反すべき協約を第3国との間に訂立するを得ざること」と書かれていた。現代の歴史書はこの議定書を「日本が朝鮮を植民地化する第一歩だった」と一致して指摘している。

明治天皇は韓国皇帝を慰問するという名目で、伊藤博文枢密院議長を特派大使として訪韓させた。伊藤大使は3月17日午前11時香港丸で仁川に到着、韓国の閔泳煥・学部大臣副将ら韓国政府要人と林公使、公使館付き武官である伊地知幸介陸軍少将らのほか数百人の居留民の出迎えを受け午後1時40分上陸した。大使は毛皮の襟つきの長い外套にシルクハット姿でステッキを手に仁川領事館まで歩いた。そこで3時20分まで休憩、居留民代表たちを接見した後3時40分発の特別列車で漢城に入京した。

翌18日高宗に謁見、国書を奉呈するとともに我が国の考え方と方針を説明した。20日の二度目の謁見では「議定書に定むる事項は貴国において遵行せらるるを要すとともに、いやしくもこれが障害たるべきものは断じてこれを排斥せられざるべからず」と迫っている。また25日の三度目の謁見では「もし韓国の態度不鮮明にしてその去就定まらずと私が復命したら、わが政府は韓国の兵力を数倍に増やし変に備える準備をするだろう」と警告して議定書実行するという約束を取り付けている。伊藤大使は27日、仁川から香港丸で貴国している。

日韓議定書が有効になったのを機に日本軍は朝鮮半島を北上、中国との国境まで到達した。そうして行われたのが4月30日から5月1日にかけての鴨緑江会戦である。日本軍はロシア軍を打ち破り、以後主戦場は満州(中国東北部)になった。

日韓議定書に基づき8月22日、第一次の日韓協約が締結された。日本人の財政顧問を採用すること、日本が推薦する人を外交顧問にすること、外国人に対する特権、譲与もしくは契約等の処理に関しては予め日本政府と協議することなどを取り決めていた。

日韓協約に従い日本は大蔵次官OBである目賀田種太郎を財政顧問として送りこんだ。外交顧問はアメリカ人のスチーブンスに委嘱している。

目賀田は、悪質で大量に発行されていた韓国の白銅貨幣の整理を断行、貨幣経済を確立した。ただ、4年後に中央銀行としての韓国銀行が設立されるまで、第一銀行を臨時の中央銀行として機能させ、金融的支配への道を開いたとして今日では批判されている。

## 第二次、第三次日韓協約

明治38年(1905)2月、思いがけない事態が発生した。沿岸警備中の日本の巡視艇が不審船を発見、拿捕して調べたところロシアのニコライ2世宛て密書を携えた韓国皇帝高宗の密使が乗っていたのである。密書には日本の暴虐ぶりや第一次日韓協約への不満、高宗自身は今でもロシアを頼りにしていることなどがしたためられていた。

時期はまさに奉天(現瀋陽)での大会戦が始まろうとしていた時であり、見方によっては日本軍の後方で攪乱工作を行うことを約束するようなものである。同じような密書はフランス、ドイツ、イギリス、アメリカにも送られたことが分かった。日本政府内に緊張が走った。

奉天大会戦をなんとか勝利した形にし、日本海海戦でバルチック艦隊を撃破してポーツマス条約でロシアに朝鮮での特殊権益を認めさせた日本は、韓国に対して強硬姿勢で臨んだ。日本側代表は林権助公使(元仁川領事)、韓国側代表は朴濟純外部大臣だった。高宗の密使事件が明るみに出たことで韓国側の立場は弱くなっていた。それにつけこむ形で第二次日韓協約が11月17日締結された。韓国を日本の保護国とする内容で、日韓保護条約とも言い、成立した年から乙巳条約とも呼ばれている。具体的には韓国には外交権を認めず日本が代行すること、現存する条約の実行に当たっては日本政府の意向に従うこと、日本政府の代表者として統監を置きその下に理事を任命すること、などとなっていた。

条約に従って韓国は日本の保護下に入り、明治39年(1906)1月31日付で日本公使館が廃止され翌2月1日統監府が設置され。統監が着任するまで長谷川好道大將が臨時統監代理となって業務を開始した。同時に仁川領事館は仁川理事庁に衣替えした。理事庁は従来の領事館業務に加え日本国内の市役所のような業務も担当することになった。行政の実務を相当するものとして居留民団に権限が与えられた。

初代の統監として伊藤博文枢密院議長が任命され、仁川を経由して3月2日着任した。日本の総理大臣を4回も勤め「明治の元勳」といわれるようになった伊藤博文が統監になったのは「ロシアに対抗するには韓国の国力をあげ日韓共同で当たるしかない」という伊藤の考え方に明治天皇が共鳴したからにほかならない。

伊藤には韓国を植民地にしようという考えは全くなかった。むしろ韓国人を高く評価していた。新渡戸稲造の「偉人群像」によると伊藤は新渡戸に「朝鮮人は偉いよ。この国の歴史をみても、その進歩したことは日本よりもはるか上だった時代もある。この民族にしてこれしきの国を自ら経営できない理由はない。才能においては決してお互いに劣ることはないのだ。しかるに今日の有様になったのは人民が悪いのではなくて政治が悪かったのだ。国さえ治まれば、人民は量においても質においても不足はない」と語っている。今日の価値基準からみても極めて妥当な考え方であり、伊藤は同じことを各地の演説会でも話している。

韓国統監府は旧日本公使館に置かれ、韓国の外交機関は全て廃止された。英、米、独、仏など各国公使館も漢城を立ち去った。

統監府が発足して1年余が過ぎた明治40年6月、ハーグ密使(特使)事件が明るみに出た。ハーグで開催された第2回万国平和会議に高宗の特使を名乗る3人の使節が現れ、会議への出席を要求するとともに、第2次日韓協約の無効を訴えたのである。各国は「条約は瑕疵なく成立している」として無視したが、日本からただ一人だけ会議の取材活動をしていた毎日新聞の高石真五郎特派員が連日報道、日本国内は政府と伊藤統監の対応のまずさを追求する世論が巻き起こった。韓国内でも政府、議会が政府の意向を無視して秘密外交を行う高宗に反発する空気が強くなった。

伊藤統監は高宗に面会、事実をただしたところ高宗は退位を表明、7月18日、皇太子が即位して純宗になった。伊藤統監は、外交権を得ただけでは改革は進まないと感じていたところだったので、内政にも関与できるよう7月24日、李完用総理大臣と協議して第3次日韓協約を締結した。

## 皇太子嘉仁親王(大正天皇)の訪韓(上)

第三次日韓協約が締結されて間もない明治40年(1907)10月、皇太子嘉仁親王の韓国訪問が急遽決まった。外交権も行政権も失った韓国皇室に対して明治天皇は気の毒に思われると同時に日韓両皇室の友好関係を築くためだった。

親露路線から親日路線に変わって間もない韓国では、もともと客人を遇することに長けているだけに歓迎ムードが広がった。皇帝純宗は、仁川まで出迎えに行くとの意向を示されたが、側近のなかには「そこまでしなくとも」とか「仁川は日本人の作った街。行くべきではない」と反対する意見が強かった。純宗は反対意見を押さえ、仁川行きを決めた。

仁川の街では皇太子訪韓が発表されると居留民会は1万5000円の臨時予算を可決し、歓迎のアーチを数力所つくり、主要な道路の中央に2間の幅で白砂を盛り上げ、眺望絶佳といわれた仁川神社に隣接する日本公園に仮屋を建設して待ちかまえていた。

先遣隊として「笠置」「児島」の2艦が来仁、それぞれから陸戦隊1個中隊が上陸、京仁線の各駅と主要道路の要衝

を固めた。

嘉仁親王は御召艦「香取」に搭乗され 10 月 10 日、東京を出港された。護衛艦として「鹿島」「浅間」「磐手」「出雲」「常磐」が随行した。随員は有栖川宮威仁親王、桂太郎陸軍大将、東郷平八郎海軍大将、岩倉具定枢密顧問官、花房義質宮内次官ら、爵位を持つ者だけでも 10 人という豪華メンバーである。仁川の生みの親である花房次官は 23 年ぶりの訪問である。

一行は 10 月 16 日午前 11 時半ごろ仁川港に入港、小月尾島沖の錨地に停泊した。周辺の海上には居留民数千人が小舟に乗り、日の丸の旗を振って歓呼の声をあげていた。漢城から出迎えに来た伊藤博文統監と長谷川好道陸軍大将がお召艦に伺候、随行団に加わった。

皇帝純宗は皇太子の李ギン(土偏に良)を伴って午前 11 時 50 分、昌徳宮を出発、南大門駅から京仁線に乗り、午後 1 時 40 分仁川停車場に到着した。停車場の前には緑のアーチが作られ、菊のご紋章を中央に日韓両国の国旗が交差して飾られていた。1、2 等待合室が対面の場とされ、紅白の幕が張り巡らされ金屏風が配されていた。

皇太子殿下は午後 1 時半、ランチに乗り換えられ棧橋へと向かわれた。ランチでも棧橋への横付けはできず、浅瀬をジャブジャブ歩いて上陸された。棧橋からは信夫淳平理事官の先導により仁川停車場まで歩かれた。

皇太子殿下のこの日の出で立ち海軍少将の盛装に大勲位の副章を付けておられた。沿道に並ぶおとしよりたちに手を振りながらゆっくりと進まれた殿下は、税関前で李完用首相、閔丙爽侍従院郷ら韓国政府首脳の出迎えをうけ、握手を交わした。

皇太子殿下はさらに停車場にむけ歩を進められたが、停車場の待合室で待っているはずの皇帝純宗と皇太子の李ギンは玄関前に出て出迎えたのだった。皇帝純宗の気持ちの表れだった。純宗は先に右手を差し出して握手を求め、挨拶を交わした。続いて皇太子同士が握手、屋外での対面が終わった。一同は設定されていた対面の場に移り、煙草をくゆらしながら懇談した。

## 皇太子嘉仁親王(大正天皇)の訪韓(下)

仁川停車場で対面を果たした皇太子嘉仁親王と韓国の皇帝純宗、皇太子の李垠はそろって明治 40 年(1907)10 月 16 日午後 2 時 30 分、仁川駅を出発漢城に入った。以後 20 日まで、宴会に次ぐ宴会、漢城市内の見学など両皇室は濃密な交流を行い、まるで親戚のような関係を作り上げた。なかでも皇太子と韓国皇太子の李垠は四日間行動を共にして仲良くなり、皇太子は韓国語の勉強を始めたほどだった。

その後体調を崩され、大正天皇として即位したものの事績評価がいまの嘉仁親王にとって、人生で最も輝いていた時だったといえる。

この皇太子訪韓の最中の 19 日、仁川のメインストリートが火事に見舞われた。午前 11 時に本町から火が出て、主要な店舗 19 戸が焼失したのである。仁川では半年前の 3 月 5 日にも新町一帯 400 戸が焼ける大火があったばかりで復興に努めているところだった。2 度にわたる火災の被害は 100 万円を超えるとされた。この影響もあり、皇太子殿下の帰国前に仁川市街を視察していただくという希望は、はかない夢となった。

その代わり皇太子殿下は随行している花房義質宮内次官に火災見舞いと市中巡察に行くよう命じられた。仁川の生みの親とも言える花房次官に、四半世紀経って発展した仁川の街をゆっくり見させてやろうという粋な計らいだった。

花房次官は皇太子殿下一行に先立って 20 日午前 7 時 34 分南大門駅を出発、仁川に入ると信夫淳平理事官、富田耕司居留民長の出迎えを受けた。そして皇太子殿下の御下賜金として居留民団に 3000 円、仁川病院に 1500 円、尋常小学校に 500 円など、計 5200 円を手渡した。また次官個人としても居留民団公共費として 50 円を寄付した。

続いて次官は二人とともに大火の跡を視察、次いで明治 15 年(1882)の壬午の変で九死に一生を得た思い出の地をたどった。これで花房公使受難の場所が特定され、後に記念碑が建立された。次官らはこの後本町、仲町、新町など市内を巡察、さらに陸海軍基地を訪れ、壬午の変で戦死した堀本禮造中尉の墓に詣でた。韓国軍の近代化に努力しながら

暴徒に襲われ、花房公使の身代わりになったともいえる中尉の御霊を前に、宮内次官・子爵にまで登りつめた花房にとっては感慨深かったと思われる。続いて次官は日本公園を訪れ仮設の仮屋から市街の全貌を眺め、眼下に横たわる仁川港に見入った。

花房次官は巡察を3時間ほどで打ち切り皇太子殿下を迎えるため仁川駅に向かった。皇太子殿下一行は午前 11 時半、見送りの韓国皇太子とともに仁川駅に到着、次官は直ちに火事の被害状況を報告するとともに信夫淳平理事官たちが御下賜金に感激していたことを伝えた。

皇太子殿下一行の艦隊は午後1時半仁川港を出港、帰国の途についたが途中、日本海軍が軍港にしようと計画していた鎮海湾内を巡回調査している。一行は東京に帰る前、九州の港湾も視察している。

## 伊藤博文と仁川

ところで伊藤博文統監時代の韓国の施政はどうだったのだろうか。伊藤は前にも書いたように、韓国の近代化を図って国力を養い、そのうえで日韓協力によってロシアに対抗しなければならないという信念を持っていた。そのために統監赴任にあたって無利子、無期限の資金 3000 万円を持ち出すことを許された。日露戦争直前の日本の国歌予算をみると 2 億 6000 万円だから、国歌予算の 1 割を超える額である。今日的尺度でいえば 10 兆円に相当すると思われる。明治天皇の強い後押しがあったからできたことだが、もしもこの金額を日本国内で使っていたら、日本の工業化はもっと速まり、昭和恐慌は防げたかもしれない。

この資金で伊藤が最も力を入れたのは教育だった。当時の韓国の文盲率は 84% に達しており、学校らしいものは 40 校にすぎなかった。しかも教えているのは四書五経などの漢籍だった。知識階級はハングル文字を蔑視していたからだった。伊藤はハングル文字の活用を思いつき、一気に 100 校を建設、日本から大量の教員を招き、ハングルを中心にした国語と数学、理科、歴史の教科を採用した。日本人教師にはハングル学習を義務づけた。この結果ハングルは急速に普及した。

伊藤は教育に続いて鉄道、道路、病院の建設などインフラ整備に力を注いだ。漢城と釜山を結ぶ京釜線は明治 38 年 1 月に開通していたが、漢城と鴨緑江河口近くの新義州を結ぶ京義線は突貫工事で進められ 39 年 3 月に全通、朝鮮半島の南北を貫く大動脈が完成した。続いて元山方面、慶州方面への鉄道などが次々と着工された。

仁川についてみると、韓国入子弟教育を狙いとした仁川公立普通学校が明治 40 年に開校した。また女子教育に熱心な伊藤の意向を汲んで仁川女学校が 41 年開設された。同校は 5 年後、高等女学校になっている。

病院では、公立仁川病院の建設が 4 万 8000 円余の下賜金により 38 年 12 月着工され、39 年 9 月竣工した。仁川沖海戦で負傷したロシア兵の手当は英国教会内の小さな病院で行わざるをえなかったほど病院不足だった仁川も、ようやく都市としてふさわしい施設を得たのだった。仁川病院はのちに京畿道立になっている。

道路関連では、仁川に住んだことのある人なら誰でも思い出がある穴門が 41 年、建設されている。2 年に及ぶ難工事だったが工兵の技術を応用し、本町方面から山根町や万石町方面に行きやすいよう丘を掘削して掘り割り状にし、气象台からの散歩道の下をくぐり抜ける立体交差の形にした。短いトンネルが門のような格好になっている。現在も虹霓門と呼ばれ親しまれている。

仁川に関する最大の工事は万年水不足に悩む市民の要望に応え、39 年 11 月、仁川水道の敷設を進めたことだった。漢江の水を鷺梁津で取り入れて浄水、約 30 キロ離れた仁川に給水するもの。43 年 9 月完成したが工費は 240 万円かかり、一部日本興業銀行から借り入れている。

伊藤統監は仁川が好きで度々部下を引き連れ訪れ、理事庁(府庁)近くの仲町の浅岡料理店で宴会を催したり食事したりしていた。浅岡料理店はその後旅館業務も開始、ひところは賑わっていた。

## 伊藤博文の暗殺と日韓併合

伊藤博文統監は就任4年目の明治42年6月退任、枢密院議長になった。第2代統監には副統監だった曾祢荒助が就任した。伊藤の枢密院議長は4回目だった。このポストは本来内政のための役職だが、日本政府としては伊藤の経験を活かすため外交交渉をも担わせることにした。

その最初の交渉は満州(中国東北部)の利権を巡るロシアとの関係調整だった。日露戦争勝利で日本はロシアが満州で持っていた利権の大半を受け継いだ。部分的には未確定だったからである。伊藤はロシアのウラジーミル・ココツェフ蔵相と会談するため満州のハルピンを訪れていたが明治42年10月16日、ハルピン駅で韓国の安重根に暗殺されてしまった。

犯人は韓国人と聞いた伊藤は「俺を撃つなんて、馬鹿なやつだ」とつぶやいた。自分を殺せば韓国は間違いなく日本に併合されてしまうのに、それが分からないのかと思ったに違いない。近年、韓国系の学者から、伊藤博文は晩年併合賛成に回っていたという説が流されているが、最期の瞬間のつぶやきは依然として併合反対だったことを物語っている。

伊藤が併合に反対していたのは「併合すると厄介な問題が出てくる」というもので、民族感情を刺激することを懸念していたのである。その後の歴史をみると、伊藤の判断は正しかったといえるだろう。

安重根は現在、韓国で英雄視されているが、日本の支配に抵抗してハーグに密使を送った前国王の高宗は「伊藤は韓国にとって慈父のような方だった。伊藤を失ったことは我が国だけの不幸ではない。日本だけの不幸ではない。東洋の不幸である。その暴徒が韓国人であることは恥ずかしさの極みである」と語っている。

首相を4回も勤め明治の元勳と言われ始めた伊藤博文が、韓国人の安重根に暗殺されたというニュースは日本中を震撼させた。山縣有朋、桂太郎など陸軍出身の政治家は早くから韓国併合を主張していたが、伊藤の反対もあって日本の世論は賛否両論が拮抗していた。伊藤の暗殺で反対論者の意見は封じられ、世論は一気に併合論に傾いた。

この情勢をみた韓国最大の政党「一進会」が12月4日「朝鮮人も日本人と同じ一等国民の待遇を享受して、政府と社会を発展させよう」という日本への併合を求める声明を発表した。「一進会」は党員100万人を擁する大組織で、白丁(奴隷・農奴階級)を除く一般国民の半数を超える勢力だった。これにより韓国政府も併合へと舵を切った。

日本政府は日韓合併について列国がどう考えているか主要国に打診した。米英は「韓国をこのまま放置しておく地域に混乱をもたらす恐れがある」として積極的に賛成、反対意見は全くなかった。

こうして併合交渉は着々と進み、明治43年(1910)8月22日、寺内正毅統監(第3代、2代目の曾祢荒助は病気で引退)と韓国の李完用首相との間で韓国併合条約が調印され、8月29日、発効した。

## 日韓併合と仁川

明治43年8月29日、日本は韓国を併合した。そうして9月30日、朝鮮統治のための組織としての朝鮮総督府を創設した。初代の朝鮮総督には、第3代統監だった寺内正毅が就任した。寺内は山口出身の陸軍軍人。戊申戦争、西南戦争に従軍、陸軍大臣を勤めた。のち内閣総理大臣兼外相、蔵相となり、陸軍元帥・伯爵になっている。朝鮮総督は国王と首相の権限を併せ持つ絶対的な存在で、軍事の指揮権はもとより司法、立法、行政の全分野の権限を握っていた。決定したことは内閣総理大臣を経由して天皇に報告するだけでよかった。

韓国皇帝家は日本の皇族に準ずる待遇を受け、李王家となった。同時に首都の漢城は京城と名称変更された。仁川、釜山、平壤など理事庁がおかれていた都市はそれぞれ仁川府、釜山府、平壤府という行政単位となり、府庁が置かれた。府のトップは府尹(ふいん)と呼ばれるようになった。

日韓併合は仁川に大きな影響をもたらした。併合によって韓国が諸外国と結んでいた条約は全て無効となったため、日本や清、各国に許された租界がなくなった。租界の行政を担っていた居留民会がなくなり、特権もなくなって行政の全ては府庁が行うことになった。

仁川にとって最も痛手となったのは金融機関がこぞって中枢機能を京城に移したことだった。仁川には明治 16 年(1883)開設の第一銀行(第一勸業銀行を経てみずほ銀行)、明治 23 年(1890)進出の十八銀行、明治 25 年(1892)進出の第五十八国立銀行(のち安田銀行、富士銀行を経てみずほ銀行)の 3 銀行があった。各行とも、朝鮮半島全域を統括する支店という位置づけで、なかでも第一銀行は一時、紙幣の発行権をもち大変な力を持っていた。しかし統監府は 42 年、中央銀行として韓国銀行(のち朝鮮銀行)を設立、紙幣発行権を同行に移した。その直後の日韓併合により総督府のある京城が行政、金融、経済の中心地になることがはっきりしたため、各行とも京城中心にしたのである。

この影響で仁川は活気を失った。しかも京釜鉄道と京義鉄道が全通して相互乗り入れ、朝鮮半島を南北に貫く動脈が完成したことも仁川にとっては不幸だった。多くの貨物が鉄道に流れ、仁川港の取扱量が頭打ちになった。仁川港は大型船が接岸できず、沖合ではしけに積み替えて陸揚げしなくてはならず、コストがかかることも響いた。京仁鉄道は盲腸線のような存在になったのである。仁川に不況の波が押し寄せ、京城の新聞は争って仁川の苦境を特集している。

仁川の人口は、日露戦争前には 6000 人に過ぎなかった。それが仁川沖海戦で勝利すると 9400 人となり、38 年 4 月には 1 万 2000 人、39 年 4 月には 1 万 3000 人とふくらんだ。日露戦争に勝ち、朝鮮半島は安全だと分かって一攫千金の夢を見てやってくる人が多かったのである。しかしこの人たちの夢ははかなく消え、仁川の人口はしばらく横ばいで停滞したのだった。